

「道」と名のつく稽古事は、そのプロダクツよりもプロセスが重要視される。例えば武道では、稽古を通じて「自他共に心身を正す」不断の研鑽・錬磨こそが重要であり、型を憶えた、技を身につけた、試合に勝ったなどというのは、初心の目標とは成りえても武道の目的ではない。

鹿島神流では、「初において身体を整え、中において心気人倫を養い、極めては宇宙創元の理を悟る。これが奥義である。」という。そこに至る過程で得た経験と悟りを、世のため人のために顕現する生き方が「道」となる。

物事を正すためには、よつて立つ柱が必要である。神様を教える単位に一柱二柱とするのもそうした意味合いであろう。

武にも、「道」「術」「技」という階層があるが、「技」は単純に技法(テクニク)であり、「術」は人の思想哲学、「道」は天(自然)の道理である。天の道理から逸脱することのないよう、思想哲学を探究し、技法として具体化する。これが武道の正しさの基準であり柱となる。特に重要なことは、自己を鍛練しながら内省し、自分の中に「正しさ」を育んでいくということである。

私が、ドイツ人の友人から聞いた『真理の秘密の場所 (The secret place of wisdom)』という話を紹介したい。

「むかしむかし、神々は大変心配されました。『もし人間が分別がつくほど十分に成長しないまま、宇宙の真理”を発見して使用してしまつたらとんでもない最悪の状態に成るだろう』と。そこで、神々は、人間が本当に分別がつくような成長をきたすまで“宇宙の真理”を隠して保存することにしました。さて、ではどこに隠したらよいか。ある神様が提案しました。『地球で一番高い山のてっぺんに隠そう』しかし、他の神々は『欲の強い人間はきつとその山に登つて見つけるに違いない』と反対しました。またある神様が『海のもっとも深いところに隠したらどうだろうか』と意見しましたが、『いやいや、それは危険だ。分別のない人間は、自らの成長をきたす前に、がむしやらにその場所を探し当てるだろう』と、やはり却下されました。最後に、最も賢い神様が次のように提案しました。『私は最適の隠し場所を知っています。“宇宙の真理”は、人間の内に隠しておくことにしましょう』『そうすれば、人間が自分自身を内省し、自分自身の成長を成し遂げたときに初めて“宇宙の真理”に出会えることになる』と。神々は大いに賛同し、こうして“宇宙の真理”は人間自身の内に隠されたのでした。」

この話では、人間は自らの内に『宇宙の真理』有しているのだが、それに気づくためには自らの修行・努力が必要だということを論じている。自性発揮の修業と鍛練を為さずして、知的作業のみで真理を解き明かそうとか、宝物探しのように全知全能の力を獲得しようなどという行為が、どれだけ愚かで禍をもたらすかは歴史の示すところであるが、いまだにそれに気がつかない人々が多い。

日本の武士道が近代化という時代の激動を経ても今なお残っているのは、武道の鍛練には、まさにこの話のように『自分自身を内省し、自己の成長を成し遂げたときに初めて“宇宙の真理”に出会えることになる』プロセスを持ち合わせているからである。それによつて、一人ひとりが確固たる思想を持ち、自立的に判断し行動できる人材を育成してきたのである。

人格形成や精神修養を全くしない人間が、莫大なる富と権力と武力を手に入れ、自己の権利を無制限に行使したら世界がどうなるのか。説明は要しないだろう。

日本の社会には、常に一貫した一つの「柱」が存在した。共存共栄の思想である。時代によつて時の権力者が私利私欲に傾き、社会が大きく腐敗・混乱した社会情勢に

なると、常に一貫した共栄共存の伝統的社會慣習を「柱」として社會が正されてきたのである。

日本が近代以降も大國の地位を保持し得たのは、ひとつには明治維新に際し、明治天皇が「すべて神武創業の始に基づく」として、神武天皇が建國の詔でしめした「八紘為宇」、すなわち家族のような社會を創るために國家戰略の根源として再確認したからであろう。

國力を發揚するためには、國民のエネルギーが集約する大義とそれを象徴する柱がなくてはならないのだ。

そして、もうひとつには、「八紘為宇」の思想が日本人に慣習的傳統として根付いており、自己を犠牲にしても他者の為を考え行動する共助社會を創るために國民一人一人が夫々努力を怠らず、人倫を育んできたからであろう。それゆえに、大規模な災害が生じて、商店を破壊し、他者を殺傷してまで食料などを奪うような浅ましい行為は起きることなく、自己を犠牲にしても他者と社會に貢献しようとする高貴な精神が表れるのである。

日本に限らず歴史がある國家の有利な点は、歴史を貫徹する何らかの共通意識が、數量化、計數化できない無形の國力になっているということだ。

現代は、目に見えないものを無視し、理解容易なデータに依拠して物事を判断する傾向が強いが、これではせつかく自分たちが歴史的に築き上げ保有している力を無効化しかねない。

計量的なデータばかりを信仰する現代の人たちは、自分は自由意志でデータを利用していると思込んでいるが、そのデータは誰かが管理・操作しているものであり、現実にはデータを管理・操作している者たちの管理下に置かれてしまう「データ信仰」宗教のようなマインドコントロールをうけていることに気づく必要があるだろう。

自分の内面にある価値観に基づかず、自分の外にあるデータに自分の人生を依存してしまっているならば、無意識の内に誰かの管理下に置かれてしまう。

自らの内なる遺伝子レベルの価値観に立ち戻り、外にあるものの影響を受ける以前に自分をまず正す、という発想が必要である。

武道で「肉体」と「精神」のバランスを重視するのは、一点に集中して安定し、自らの心身を正すためである。そして相手が挑んできた時にも、自らの正しいバランスを相手に作用させ相手も正していく。その延長線で「社會を正し」「國を正し」「世界を正す」という発想に広げていくのである。稽古は、その正しい力を自分の中に育むためのものである。

世界中で最も長く經營を続けている企業は、五七八年創設の「金剛組」という日本企業であり、200年を超える企業数は3973社と圧倒的に日本が多いそうだ。その大多數の經營方針は、「家族のような会社」であり「世のため人のため」だという。

人倫と道徳こそが社會と國家の力の基盤であり、日本にはそれを社會戦力化できる風土があるのだ。

様々な政策議論は、損得勘定以前に、自らの価値観と照らし合わせて正しいものなのかどうかを判断することから出発しなければならない。

長い歴史の中で、我々日本人は、人倫道徳が文化慣習として自ずと身につくほどまでに高貴な社會を築き上げてきた。その価値基準に立ち戻り社會を正していくことが必要なのだ。

そしてそれは、「人權」を超えたよりよい世界を創造するための思想として、世界の人々と共有していくべきものであろう。